

農林水産統計からみた 養蜂産業の推移

社) 日本養蜂はちみつ協会

農林水産省畜産局では、毎年養蜂振興法に基づく養蜂業者等の届出について各都道府県からの報告をもとに「養蜂関係資料」として取りまとめている。

まとめられた数字は、「農林水産統計」として広く利用され、日蜂通信でも部分的には折にふれ紹介してきた。

今回、その資料のなかから、飼養者数や蜂群数、蜜源植物、生産物、さらには花粉交配など各項目を取りあげ、蜂産業を取りまく基礎的な現況やその推移を紹介することで、種々の課題に直面している産業の位置づけを明確にし、今後の課題克服のための資料としていきたい。

飼育者数

平成5年(1993)1月1日現在、全国のみつばち飼養者は7221戸となっている。

このうち養蜂を業とする者は4561戸で全飼養者の63%を占めている。

この飼養者数の年度別推移は図1の通りで

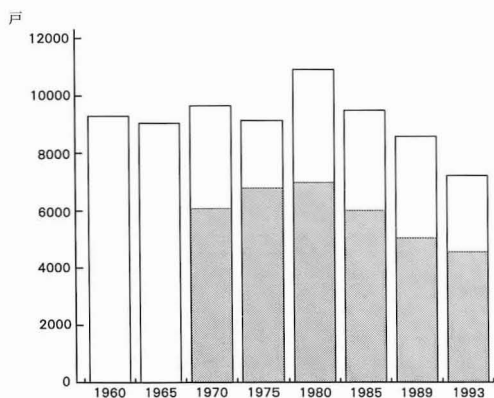


図1 ミツバチ飼養者の推移 斜線部は養蜂業者 (1965年までは区別なし)

ある。

このように、飼養者は昭和54年(1979)の11785戸をピークに毎年300戸前後づつ減少、この14年間で4564戸も減っている。これは昭和54年(1979)の6割強にまで減少したことになる。

さらに、この減少のしかたも最初のころは一年おきに減り方が大きかったり、小さかったりしたが、最近、ことに平成に入ってからでは毎年300戸以上が確実に減少している。

この飼養者数を地域別にみると、平成5年(1993)現在では図2のような構成になっている。

これを昭和55年(1980)当時と比較すると、若干の地域差がうかがえる(図3参照)。

図でみるように、東北地方を除くと、北の地域ほど減少の傾向は小さいことがわかる。

さらに細かく都道府県別にみると、「神奈川県」「鳥取県」では55年(1980)より増加しているのに対して、「宮城県」「栃木県」「福井県」などでは当時の三分の一程度にまで減少している。

蜂群数

一方、蜂群数は平成5年(1993)1月1日現在226214群でこれもピークの昭和54年(1979)当時の7割弱に減っている(図4)。

図でみるように、もっとも減り方の激しかったのは、平成3年(1991)の18000群、次いで昭和63年(1988)の11000群となっている。

しかし、この蜂群数の減り方は飼養者数の減り方よりゆるやかで、先にみたように飼養者数は4割近く減っているのに対して、蜂群数は3割強となっている。

すなわち、減少した飼養者の多くは規模の小さい飼養者ということになる。

試みに一戸あたりの蜂群数を算出すると、昭和55年(1980)当時が全飼養者で19.3群(業者だけでは43.8群)に対して、平成4年(1992)では31.3群(業者では47.3群)と増加している。

また、100群以上を所有している業者の蜂群



図2 ミツバチ飼養者の地域別構成 (1993年1月現在)

数が全業者中に占める割合をみると、昭和45年(1970)には50%であったのが、平成5年(1993)には62.5%になっている。

この蜂群数の推移を地域別にみると、図5のようになる。

このように減り方のもっとも少ないのは東北地方で、ピークの昭和55年(1980)当時から1割も減少していない。飼養者数では東北地方は4割も減少していたことからすると、小規模の飼養者が大巾に減少したことになる。

ちなみに、ここでの飼養者一人あたりの蜂群数を算出してみると、昭和55年(1980)の18群に対して、平成5年(1993)では28群と5割以上の増加となっている。

蜜源植物

この蜂群数を規定するのは蜜源植物の植栽面積である。

平成4年(1992)では利用された蜜源植物の植栽面積は約30万haである。従って、これを蜂群1群あたりにすると1.36haを利用していることになる。この植栽面積の年度別の推移をみると、図6のようになっている。

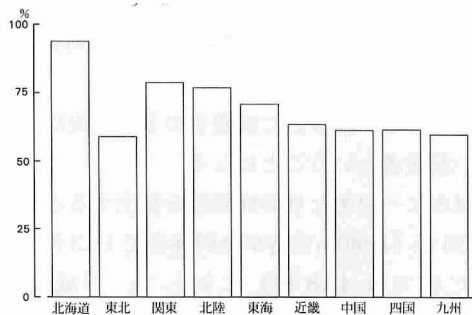


図3 対1980年比のミツバチ飼養者(1993年) 1980年を100としたときの各地域のミツバチ飼養者

このようにみると、減少の激しかったのは昭和45年(1970)から55年(1980)の10年間の高度経済成長の時代で、その間に植栽面積は半分以下になったことがわかる。

この当時もっとも影響を受けたのは「れんげ」「なたね」といった作物類の蜜源植物で、これらはそれまでの主要な蜜源となっていたものである。

これらの作物類の蜜源はその後も回復はみられず、昭和45年(1970)当時この2つの蜜源で10万haもあったものが平成4年(1992)には2万haにまで減少している。

しかし、蜜源植栽面積としては激減した昭和45~55年(1970~1980)とそれ以降は他の指標ほど大きな減少はみられず、1群あたりの植栽面積は、平成4年(1992)においては前年の数字を越えるまでになっている。

生産物

次にこれらの蜂群が産出する主な生産量をみることにする。

図7で示したのが主要な養蜂生産物の生産量の年度別推移である。

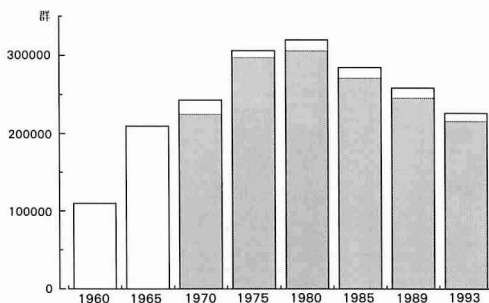


図4 飼養蜂群数の推移 斜線部は養蜂業者が所有する蜂群数 (1965年までは区別なし)

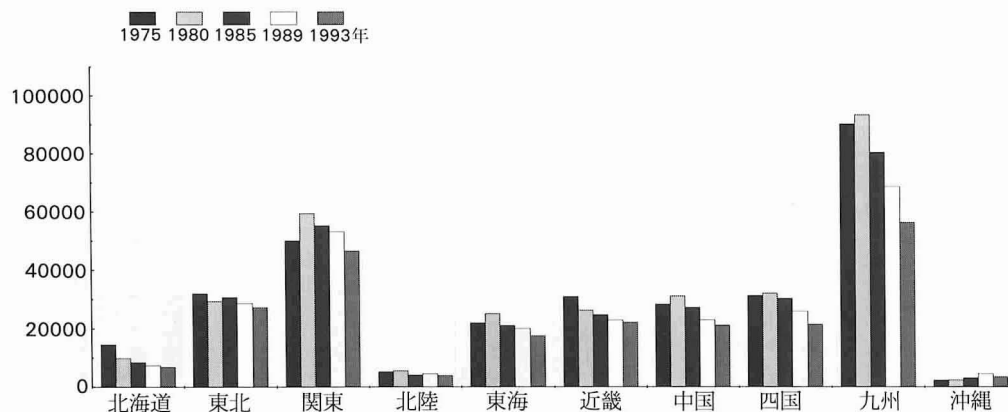


図5 地域別飼養蜂群数の推移（1975年から1993年まで）

このうち、もっとも主要なものは「ハチミツ」であるが、このハチミツの生産量のピークは昭和40年（1965）ごろで、この当時は8500tを生産していたが、平成4年（1992）には3800tにまで減少している。これはピーク時の45%弱である。

また、この生産量は絶対量の減少だけではなく、1群あたりの生産量もピークの昭和40年（1965）ごろは40kgを越える数字をあげていたのが、45年（1970）になると30kgになり50年（1975）以降は20kg前後と激減している。

とくに平成4年（1992）は16.5kgとこれまでの最低を記録した。

国内の生産量全体としてはピーク時の45%以下に減少しているわけであるが、これを地域

別にみると若干その減少のしかたも変わってくる。

減少の巾の大きい地域は九州、中国、四国など南の地域で、逆に東北、北陸などでは微増している。

この結果、昭和50年（1975）には全体の3割近くを占めていた九州のハチミツ生産量は平成4年（1992）には2割強までシェアを落すことになった。

この生産量に対して消費量は40年（1965）の15000tから昭和56年（1981）には30000tを越え、特殊な需要を除けば現在では40000t前後まで伸びてきている。

したがって、この消費量と生産量の差は輸入に依存しているわけであるが、これらの関係は図8のようになっている。

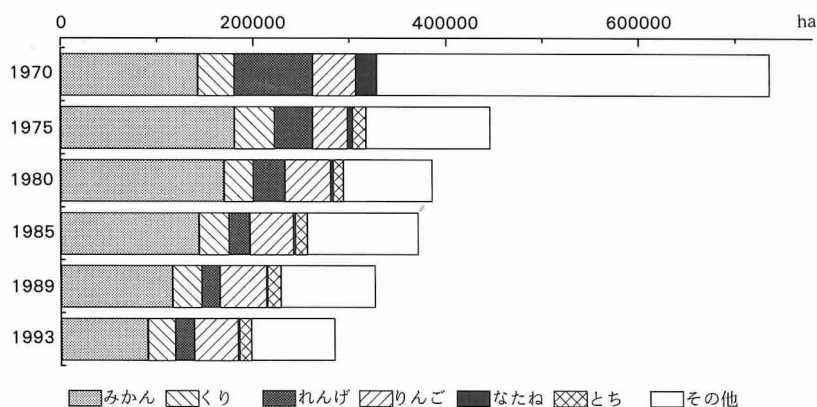


図6 蜜源植物植栽面積の推移

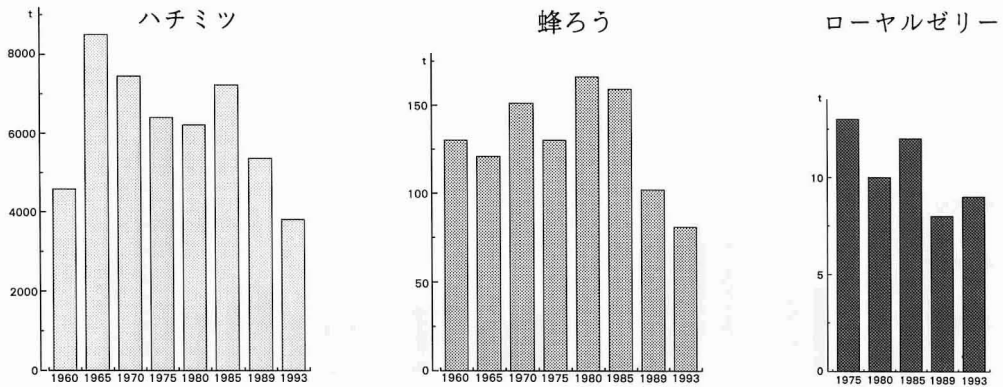


図7 主要養蜂生産物生産量の推移

このように、現在では全消費量の9割が輸入で国内で生産される量は1割ということになっている。

しかも、この輸入量の9割前後が中国によるもので、残りの1割を20ヵ国あまりから輸入している。

この生産物についてみると、「蜂ろう」と「ローヤルゼリー」の生産のピークは昭和57年(1982)で、蜂ろう188t、ローヤルゼリー18tとなっており、平成4年(1992)でこれが81tと9tにそれぞれ減少しており、ハチミツと同じようにピーク時の45%前後となっている。

花粉交配

このように蜜源植物の減少などによって生産物が減少していく中でミツバチの花粉交配への利用が盛んになっていった。

図9は利用状況の変化を年度別にみたもの

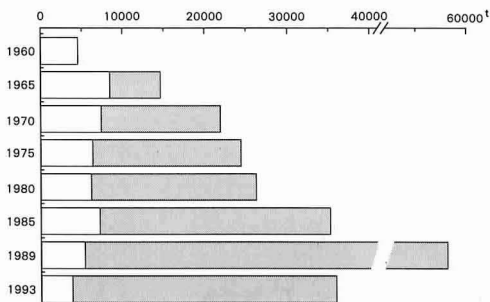


図8 ハチミツ消費量の推移 (白い部分は国内生産量=自給分)

である。

この面での利用のピークは平成2年(1990)となっており「イチゴ」においてはすでに昭和60年(1985)の数字も切っている。

このグラフをみる限りはまだ盛んなようすがうかがえるが右肩上がりの成長とはいかなくなっている。

おわりに

このように統計数字をならべてくると明るい材料を見つけることはなかなか難しそうにみえる。

しかし、多くの力を結集すれば打開の途はあるはずである。また多くの努力を傾注して打開していかなければならない。

努力の方向はいくつかあるであろう。中でも

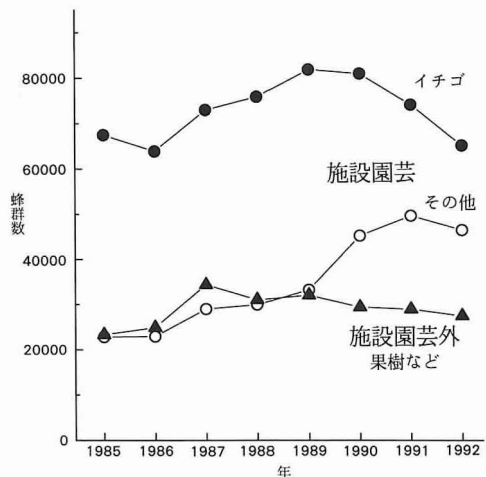


図9 花粉交配用ミツバチ導入群数の推移

表1 国土利用の変化

用途/年度	1965	1972	1975	1980	1985	1989
農用地	64300	59600	57600	55900	54900	53800
森林	251600	252900	252900	253400	252900	252600
原野	6400	5000	4300	3400	3000	2800
内水面	11100	12700	12800	13100	13200	13200
道路	8200	8300	8900	9900	10700	11300
宅地	8500	11000	12400	13900	15100	15900
その他	27000	27900	28600	28100	28000	28100
合計	377100	377400	377500	377700	377800	377700

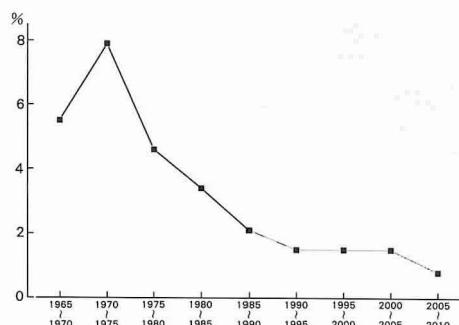
単位は km²

図10 人口伸び率の推移

過去5年間の伸び率を示す（1995年以降は推定値）

重要なのはやはり蜜源植物を増やすための地道な努力を続けることである。これまで続けてきた努力をより大きく、より広く継続することである。蜜源植物は先にみたように開発の波におされ続けて減少を重ねてきたが、他の指標をみる限りその圧力も次第に弱まっている。表1は国土庁の「国土利用の変化」であるが、この中で「道路」「宅地」などの開発需要が対比年度比でみると平均2~4%で続いていたのが昭和60年（1985）ころから2%を切り次第に小さくなりつつある。

さらに、この開発圧力の大もとにあるのは人口の増加である。図10は国勢調査および厚生省の推計人口を対前回比でみたものである。蜜源が大巾に減少していたころは対前回比8%近い増加があったものが、昭和60年（1985）ころには3%台、平成になると2%台と減少し、10年もすると1%を割るような状態になることが予測されている。

さまざまな新しい課題が提起されたりすることがあっても、大きくみると蜜源を取り巻く環境は変わりつつある。

そのような時代背景のもとに蜜源植物の増殖

運動をねばり強く進めていけば、やがて実を結ぶに違いない。

ここまでは統計数字をもとに量的な側面だけをみてきた。しかし、数字で表わすことができない質的な面でも努力が要求されている。

各種の指標は減少の方向を示しているが、これからは量的増大に基づく利益の獲得という指向を捨てて、人々の満足に基づく利益の獲得へ指向するという努力の方向転換が求められている。

ハチミツをいかに多く採って、いかに多く売るかという量的な拡大は他の多くの業界と同じように難しくなっている。

そこで要求されるのは、的確なマーケティング・ミックスであろう。「どんな製品やサービスを」「どのような価格体系で」「どのような場所や経路で」「どのようなプロモーションで」といったさまざまな要因をいかに組み合わせて顧客に満足をしてもらうかという、より深い研究、努力である。

幸いなことに、前にも見たとおり、蜂製品の需要は少しも減っていない。そのような需要動向に安住することなく一人一人がそれぞれの分野で付加価値の高い仕事を追求していく努力が求められている。

（〒101 千代田区神田駿河台1-2 馬事畜産会館内）

編集委員会から

本記事は（社）日本養蜂はちみつ協会発行の日蜂通信第398号（1995.5.25）に掲載されたものを、同協会事務局の許諾を得て、図版などの改変を加えて転載したものである。